



80's リバイバル

冬になると、夕方4時頃はもう外が大分暗くなってきます。冬になるにつれて、町中でも、郊外でも、待っていましたが言わんばかりに、夜の野外イベントが増えてきます。

野外の仕事といえば、先日、クリスマスイルミネーションの一環でレーザーショーのお手伝いをさせていただきました。レーザーテクニシャンは、照明テクニシャンとは違って、意外と人数が少ないそうです。その仕事で出会ったレーザーテクニシャンは、ヨーロッパでイベントがある度に借り出されるそうです。「僕も昔は照明をしていたけど、今はレーザーの方が楽しいし、照明だけやっているよりは、お金になるしね。」と冗談まじりに、彼は言っていました。

室内だけでなく、野外のフェスティバル/コンサートが多いイギリスでは、特にレーザーを使った公演をよく目にします。レーザーエフェクトはずっと古いものだと思っていましたが、どうもそうではないようです。きっと使い方の幅が広がってきたのでしょう。けばけばしくない、おしゃれな使い方をするデザイナーさんも何人かいるようです。たとえば、シャンデリアにレーザーを当てて多色の反射と影を見せたり、ビジネス街のあっけない建物を遠

くからレーザーで縁取りして、建物の意外性を見せたり、コンテンポラリーダンスでダンサーがレーザーを片手に持って踊っていたりと、ありとあらゆる形で使われています。

光を線として見せることは、私たち照明デザイナーもよくすることですが、レーザーまでいくと、主張が強すぎて、なかなか舞台照明では使いにくいと思っていました。でも、その主張をうまく活かして、セットの一部、小道具の一部とすることは、リスクですがとても面白そうです。今度、自分も是非どこかで使ってみたいと思いました。

わざとけばけばしく見せて、80～90年代のレイブパーティー（日本で言うところのジュリアナ東京ディスコ）雰囲気をリバイバルさせる演出もよく見られます。そのような野外でのレーザーエフェクトが素晴らしく見えるのは、イギリスならではの、霧や雨のせいかもしれません。

レーザー以外にも80年代に流行ったらしい、カラーオイルプロジェクター

やアークラインストロープを貸し出しているレンタル会社や、個人会社もたまに見ます。特に、イギリスではこのアークラインストロープは、もうどの工場でも作られていないそうで、お得意の個人レンタル会社の社長さんは、「絶対リバイバルがくると思ったので、イギリス中のアークラインを90年代に買い集めておいたのさ」と。彼は、このような珍しい照明機材をたくさん持っているのです。先日は、このアークラインストロープを Giles Deacon のファッションショー（照明デザイン Urban Electric）で使いました。

キン、キン、キン!と音を鳴らしながら、滝のように直列で光が流れる様は、とてもキザなのですが、リバイバルはファッションも同じで、キザなほどクールと受け止められるし、そのアナログ的存在感が逆に新鮮に写るようです。私たちが年をとった頃には、おそらくほとんどの照明がLED化されていて、ハロゲンランプを使うことがリバイバルとして、ファッションとして帰ってくるのかもしれないね。

